

## 人間分子論5—文明相におけるマイクロな循環

“完璧なマニュアルの存在するコンビニこそが、私を世界の正常な「部品」にしてくれる（村田沙耶香<sup>[1]</sup>）”

ここまで、文明相におけるエネルギー・水・大気・物質の循環をマクロ的視点で見てきました。ここでは、人間（ヒト）にズームンして、文明相におけるマイクロ的視点から考察してみましょう。「ヒト」は、生物相における人類、「人間」は、文明相における人類、をそれぞれ意味します。本論では、「ヒト」と「人間」の2つの用語を緩く使い分けています。

人工的なエネルギー循環の中で、人間はどのような役割を果たしているのでしょうか。都市文明という大きな人工サイクルの中に、業界、会社、個人、というように、時空間スケールの異なる、多様なリズム運動が階層的に共存しており、大きな渦から小さな渦へとエネルギー輸送が行われています。人間は文明システムの創造主でありながら、ひとたびシステムが形成されると、個々の人間よりも時空間的に遥かに大きい回転エネルギーを持続させるために、創造主である人間が逆にシステムに従属するようになります。メトロネットワークという巨大な都市のリズム運動を維持するのに、膨大なエネルギーと人的資源が投入されています。運転手、車掌、駅員はもちろんのこと、正確な運動ダイヤを組む人、トラブル対処にあたる人、皆、決められた時間に出退社し、決められた仕事を歯車のように精密にこなしていきます。このような人工的リズム運動の絶妙な連携によって、人工サイクルが維持されています。この人工システムに乗って大量の人間が、朝に晩にと、潮の満ち引きのように輸送されます。都市空間に散って行った人は、それぞれの場所で、退社まで、別の大きな都市のリズム運動を支えるために、せっせと小さな渦運動に励みます。24時間営業のコンビニエンスストアも同様です。大量の物資が日々、スケジュール通りに輸送され、定刻通りに出退社する店員によって陳列・販売されます。この人工システムに乗って、大量の物資と人間が、朝に晩にと、潮の満ち引きのように、コンビニを中心に、集まり、散っていくのです。チャップリンのモダンタイムスのように、ベルトコンベアーのラインに組み込まれた人間は、社会の歯車としての構図はわかりやすいですが、極めて高度な技術や知識を要する専門職とでも、人工システムを支える渦の一つであるという点においては、構造上、ラインに組み込まれた人間と大差ないのです。余人をもって替え難い存在はあっても、余人をもって替えられない存在は無く、そのような過信は、本人や周囲の思い込みです。この文明相の人工サイクルに組み込まれた小さな渦である人間は、生物相において自然循環の1つの担い手として定義された小さな渦であるヒトではありません。「ヒト」としてのA君は、「人間」としてのB社若手社員です。我々は、明らかに2つの顔を持っており、年齢や環境によって、その2つの顔の重みや使い分けが異なってくるのです。

このように、人間（ヒト）は、生物相と文明相の2重生活を送っています。人間（ヒト）が生物相・文明相、どちらの渦運動・リズム運動により強く影響されるかは、もちろん、各人の生活スタイルなどに依存します。文明相の人工的な渦運動・リズム運動は、要素還元的に人間自身が設計しただけあって、大変使い勝手が良く、とても便利です。しかし、利便性と逆比例するように

リスクは向上します。生物相の自然の渦運動・リズム運動は、自己組織的で人知が及ばないため、融通が利かず、ある意味不便です。しかし、利便性が低い分、リスクは低いのです。

2重生活の極端な場合を見てみましょう。まずは、自然の循環にほとんど依存せず、人工の循環に埋没して生活する場合です。超高層マンションの上層階で生活し、パソコンで仕事する人について考えてみましょう。エネルギー・水・空気は、人工的循環によって完全に制御され、食料品・日常雑貨・備品など、あらゆるものが、インターネットを通じて購入可能です。外出する際は、地下の駐車場から直接目的地まで赴き、その間、車内の空気は快適にコントロールされています。独自に開発したAIによる投資関係の仕事は順調で、お金には困りません。掃除・洗濯も、全て外注で済ませられます。人的コミュニケーションは、スマホを用いたSNSや、テレビカメラで十分です。恐ろしく広い50階の部屋で巨大な4つのPCモニタを前に、カップラーメンをそそりながら、1時間で、2億儲かったと、呟いています。50階からの東京の夜景は壮観ですが、その変化はとても小さいものです。年一度の花火が夜空を彩りますが、それも人工的演出に過ぎません。風景に日々変化を与えるのは、大気質の微妙な変化による明暗、天気の違いによる空や雲の按配、そして、わずかな街路樹の色づきなど、都市に残された生物相の断片だけ、です。このような生活は、極めて便利で快適ですが、ハイリスクでもあります。一度、地震・大雨・火事などで、人工的なエネルギー供給が途絶えると、連動して、水・大気・物質、その他すべての人工的循環が止まってしまいます。命に係わるリスクになることもあるでしょう。

もう1つの極端な例として、原始生活を考えましょう。しかし、現代社会においては、如何に山奥に籠って仙人めいた生活を送ろうとしても、文明相の輪から完全に切り離されることは、ほとんど不可能に思えます。マスメディアに面白おかしく取り上げられる、現代の仙人たちは、電気や水道が通った山小屋に住んでいたりします。電気・水道が無い場合でも、食料の調達には難題です。自然の動植物を捕獲・採取出来ても、調理が必要です。結局、蠟燭や火種、各種調味料を調達するために、定期的に村里まで行って、山の幸と、生活必需品を物々交換するなり、金銭に交換することになります。このような経済活動は、文明そのものです。戦後28年間、終戦を知らずにグアムの山奥で生き延びていた横井正一さんの暮らしが、代表的原始生活と言えるでしょう。原始生活は、不便極まりないですが、都市生活が内包するような壊滅的（カタストロフィック）なリスクは少ないと言えます。

この2つの極端な例を別にすれば、人間（ヒト）の大多数は、生物相と文明相を、同時並行的に生きています。しかし、そのことは一般的にあまり明確に意識されていません。幼少から芸能人として売れ、そのまま老齢まで、芸能生活を中心に生きてきたスターAがいます。スターAは、スターAとしての名声・活躍を維持し続けるために、肉体的、精神的に、膨大な努力を払わなければなりません。時に、その努力は、スターAの生物相の時間を大幅に侵食し、その結果、生物相としての自分の顔を本人も忘れてしまい、私生活においても、誰が見ていなくても、スターAを演じ続けてしまう。その結果、文明相のスターAとして、人生を終えることになります。ある小説では、周囲に理解されない風変わりな主人公が、コンビニ店員として歯車となり、人工循環の一部になることによって、その文明相の顔を隠れ蓑に、自己のアイデンティティを維持します。有名会社の重役だった人が、定年退職すれば、文明相の顔を失い、生物相の顔だけになります。それにも拘らず、文明相の顔を捨てきれず、周囲に傲慢になったり、昔の自慢話をした

りする人がいるものです。

#### 参考文献

[1] 村田沙耶香、コンビニ人間、文芸春秋単行本